

吉野明美さん (経験年数：8年)

子どもたちとは
“友達”でありたい。



大切にしているのは
言葉の選び方と伝え方。

「アケちゃん！」歓声の響き渡る室内で子どもたちに呼ばれているのは、放課後児童支援員・吉野明美さん。キャリア9年目、自身も中学生と小学生の女の子の母親であり、家事育児と両立しながら放課後児童クラブの責任者として働いています。次女の出産前、吉野さんは介護の仕事をしていましたが、求人を見てこの仕事に挑戦することに。「実は生粋の子ども好きというわけではなく、我が子と親戚の子どもぐらいいか接したことがなかったのが、長く続けられるか少し不安でした」と当時を振り返ります。でも、クラブの子どもは我が子と同世代。育児の経験を仕事に活かせるし、仕事で得た知識が自分の育児に役立つかもしれない…そんな期待もあって、仕事を始めたそうです。「案ずるより産むが易し」で、研修を受け放課後児童支援員の資格を取得すると、先輩に助けられながら着実に子どもたちの信頼を築いていきました。「対等な関係でありたい」という理由から、「先生」ではなくニックネームで呼んでもらっているという吉野さん。「子どもたちとは友達みたいな感覚ですね」と話します。呼び名一つとってもこだわりを持つ吉野さんは、言葉やコミュニケーションをととても大切にしています。それは保護者に対しても同じです。何かトラブルがあったときも連絡帳に頼らず直接伝え、保護者がお迎えに来られない場合は電話で伝えるようにしているのだそう。「言い方一つで受け手の印象は変わりますよね。コミュニケーションが苦手な子もいるので、一人ひとりに合わせて話すようにしています」と吉野さんは言います。

また、クラブを「学校でも自宅でもない子どもの“第三の居場所”」と位置づけ、家庭や学校と連携して子どもが抱える問題や悩みにも寄り添っています。「先生や親に心配をかけたくなって、悩みを抱えてしまう子もいるので、そんな子の心の拠り所になれば。」

学童だからこそ学べること。

吉野さんは週40時間程度働いています。家事育児との両立は大変ですが、家族の理解と協力に日々助けられているそうです。「卒業生が立ち寄ってくれたり、保護者に頼っていただけたりするとうれしいし、だからこそ頑張れる。今までしてきた仕事の中で一番楽しいですね」と笑います。吉野さんが願うのは、ただ子どもを預かるのだけではなく、ここが子どもにとって何かを得られる場になること。年齢の違う子どもたちが集まる場所だからこそ、コミュニケーションや思いやりの心、自主性などを学べるのです。吉野さんが子どもと同じ目線で物を見、感じているからこそ、子どもたちにもそうした想いが伝わっているのでしょう。放課後児童支援員は吉野さんにとってまさに天職。「アケちゃん」と子どもたちの“友情”はこれからより一層深まりそうです。



取材先 阿久根学童クラブ (運営：阿久根市社会福祉協議会)
〒899-1615 阿久根市琴平町 68-1 TEL 0996-72-3161

若林良宏さん (経験年数：4年)

自宅でも学校でもない
子どもの“居場所”を作りたい。

字を誉めてくれた
恩師のようになりたくて。

「小1のとき、担任の先生から“の”の字を誉められたことがあるんです。ただそれだけのことがすごくうれしくて、ずっと子どもに携わる仕事をしたいと思っていました。親が中学校の教員をしていて、教育の大切さを肌身で感じてきたというのがありますね」と話すのは、放課後支援員として働く若林良宏さん。学生時代に初等教育を学ぶもその夢が実現することではなく、さまざまな仕事を経験しました。そして平成29年、若林さんは放課後支援員という形で長年の夢を叶えることとなったのです。野里学童育成クラブには、放課後になると隣接する野里小の児童約40名が訪れます。一番乗りを狙って駆け込んで来る子やお友達とふざけながらやって来る子達を、若林さんは笑顔で迎えます。室内はあっという間に子どもたちの嬌声が溢れかえりますが、まずは宿題。終わったらおやつ、残りの時間は自由に過ごします。一人ひとりにくまなく声をかけるのは、子どもたちの異変を見逃さないため。いつもと様子が違う子がいれば、頻りに近くを覗いてみたり、キャッチボールに誘ったりすることも。「悩みがあっても時間が経ってからポツリポツリと話してくれる子もいるので、話しやすい雰囲気を作ってそのときが来るまでずっと見守ります。」ときに「取り合い」になるほど、子どもたちから人気の若林さん。その理由は、分け隔てなくすべての子どもに深い愛情を注ぎ、心を寄せているからでしょう。



同じ空間と経験を
共有することで得られるもの。

「子どもたちが何かに挑戦し、できるようになって、とびきりの笑顔を見せてくれたときは最高にうれしい」と若林さんは言います。逆上がりや一輪車、縄跳びなどが初めてできたときは、動画を撮って保護者に送ることもあるそう。「同じ空間で同じ経験を共有することでしか学べないこともあると思うんです。そうすることで子どもと一緒に私自身も成長させてもらっている気がします」と話します。若林さんは、自身の役割を「子どもにとって自宅でも学校でもない“居場所”を作ること」と捉え、児童クラブだからこそできることを模索し続けています。スポーツ大会や長期休みの宿泊体験もその一つ。児童クラブには1年生から6年生までいるので、一人っ子でもお兄ちゃんお姉ちゃん役があります。また、特別支援学級の子も一緒に行動するため、支援員としての難しさを感じつつも、それが児童クラブの醍醐味だと若林さんは考えています。「保護者が迎えに来たときに『えーっ！まだ帰りたくない！』と駄々をこねられると内心すごくうれしいです。それに、野里小の運動会も1年生から6年生まで応援に忙しいですが、毎年楽しみにしています」と笑う若林さん。目標は、今預かっている子どもたちの子をいつの日か預かること。そして、幼き日に自分に自信をつけさせてくれた“の”の字の先生”みたいな存在になること。子どもたちを見つめるその目は愛情に溢れています。



取材先 野里学童育成クラブ
〒893-0056 鹿屋市上野町 4157-1 TEL 080-4947-3190